



教育に新聞を
Newspaper in Education

2023(令和5)年度

鳥取県 NIE実践報告書



鳥取県NIE推進協議会

目次

●巻頭言「鳥取県 NIE 推進協議会の継承と発展に向けて」……………	1
鳥取県 N I E 推進協議会	会長（広島経済大学准教授） 加藤 博和
●2023年度鳥取県 N I E 実践指定校の報告	
①新聞をもっと身近なものに……………	2
米子市立義方小学校	教諭 圓山 那穂
②鳥取中央育英高等学校の取り組み～図書館からの実践として～……………	8
鳥取県立鳥取中央育英高等学校	司書主任 前田久美子
③鳥取西高等学校の取り組み—社会とつながる N I E を目指して—……………	13
鳥取県立鳥取西高等学校	教諭 中野 美紀
●第28回 N I E 全国大会・松山大会 概要 ……………	23
●第28回 N I E 全国大会・松山大会に参加して……………	27
記事から熟考する習慣大切に	
	鳥取県 N I E 推進協議会会長 加藤 博和
改めて新聞のよさを考える	
	鳥取県 N I E 推進協議会アドバイザー 岩井 克之
長所と短所を理解し活用	
	米子市立義方小学校教諭 堀田 純生
生徒の成長につなげたい	
	岩美町立岩美中学校教諭 出田 涼介
人とのかかわりは不可欠	
	鳥取県立鳥取西高等学校教諭 中野 美紀
●鳥取県 N I E 推進協議会 会則……………	30
●「出前授業」「ゲストティーチャー」のご案内 ……………	32

鳥取県 NIE 推進協議会の継承と発展に向けて

鳥取県 N I E 推進協議会会長

加藤 博和 (広島経済大学准教授 (前米子高専教授))



今年度も実践報告書ができました。N I E の取り組みと、その記録や成果の共有が、次につながっていくことをありがたく思います。

①実践指定校での N I E 活動

実践指定校 (4 校 岩美中学校は辞退) の鳥取西高校は 2 年目、義方小学校、鳥取中央育英高校はそれぞれ新規での取り組みで、どのような実践をされたのか、報告が楽しみです。その報告から私たちも学ばせていただきたいと思います。

②ホームページの開設

昨年度の総会での提案がいくつか実現しました。

コロナ禍を経験したこともあり、当協議会もホームページを持って広く発信したり情報共有したりしていこうということで、事務局のご尽力により、ホームページが立ち上がりました (<https://www2.nnn.co.jp/sp/nie/>)。

当協議会の構成、活動内容、実践報告書のバックナンバー (2019～2022 年度) やこれまでの実践指定校の報告会の動画 (2021、2022 年度) など見ることができます。

③セミナーの開催

N I E やその活動について知ってもらい、実践の輪を広げていくために、当協議会の主催でセミナーを開催しては、ということで、昨年 12 月 (冬休み) に「第 1 回鳥取県 N I E セミナー」を開催しました (鳥取県教育委員会にご後援いただきました)。

米子高専を会場に、オンライン (Microsoft Teams) を併用し、約 30 名の方にご参加いただきました。新しくアドバイザーになられた音田正顕氏、鳥根県 N I E 推進協議会の松浦和之会長 (出雲市立西野小学校長)、ゲストティーチャーを招いた授業を実施されている鳥取西高校の中野美紀教諭にそれぞれご登壇いただき、充実したセミナーになりました。ぜひ第 2 回以降につなげていきたいと思います。

第 1 回の様子は、当協議会のホームページに動画がアップされていますのでご覧ください。

④ N I E 全国大会への参加

上記セミナーにご登壇いただいた鳥根県 N I E 推進協議会とは、昨年 8 月に松山市で開催された N I E の全国大会で懇親を深め、連携強化が図られました。

同大会では、夏井いつき氏の講演を聴いたり愛媛県などの N I E の活動に触れたりして、有意義でした。本報告書に、小職も含め当協議会からの参加者の感想などが掲載された日本海新聞の特集紙面 (9 月 2 日) の内容も収録されていますので、ご一読いただけましたら幸いです。全国大会への教員派遣も当協議会の事業の一つです。

実践指定校や県内各校に出前授業やゲストティーチャーとして訪問していただいた新聞各社・通信社の皆様にお礼申し上げます。県内の学校の先生方の研修会で N I E の活用法を講義していただいた藤田安一コーディネーターに敬意を表します。そのほか、当協議会の活動にご協力いただいております多くの皆様に感謝申し上げます。

その一方で、学校単位での N I E の実践 (指定校) が難しくなっているというような状況もうかがいます。

そのうえで、実践指定校の各校には、その期間 (2 年間) が終わっても可能な範囲で実践を継続していただきたく希望いたします。

また、学校単位は難しくとも、先生方を例えば当協議会が「N I E 実践者 (N I E インストラクターや N I E サポーターなど (仮称))」として認定し、授業に使える新聞記事やセミナーの案内などの情報をお送りしたり、実践内容をレポートしていただいたり、といった相互の関係性を構築、維持できたらと思ったりいたします。いわば N I E の“関係人口”を増やしていきたいところです。教育関係者以外の、事業者の方や自治体の方、各種団体や市民の方などもよいのではないかと考えます。

私事ながら、会長に就任して 3 回目の巻頭言を書かせていただきました。これまでの当協議会の歴史と実績を継承しつつ、新しい取り組みも行って、持続可能で発展的な (S D G s) な N I E にしていければと思います。引き続き皆様のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。

新聞をもっと身近なものに

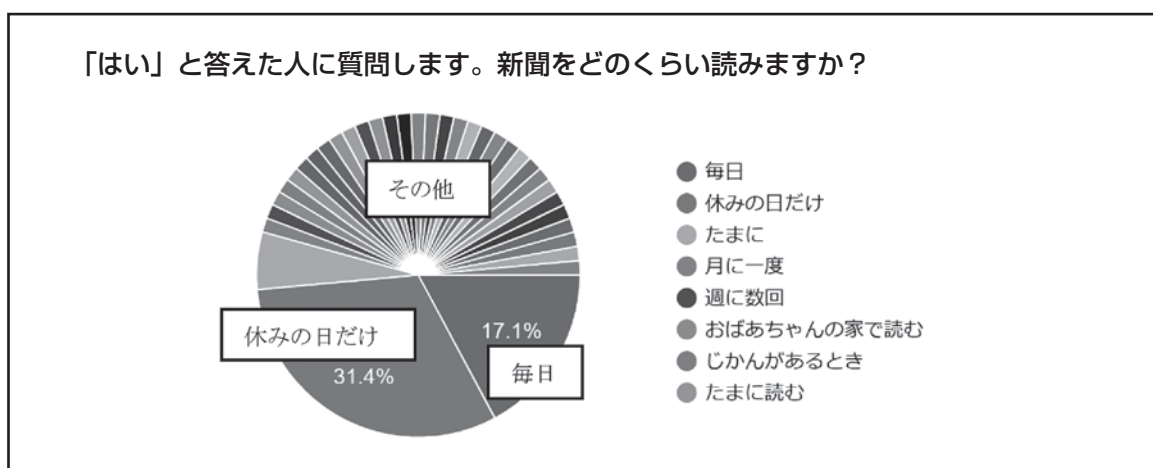
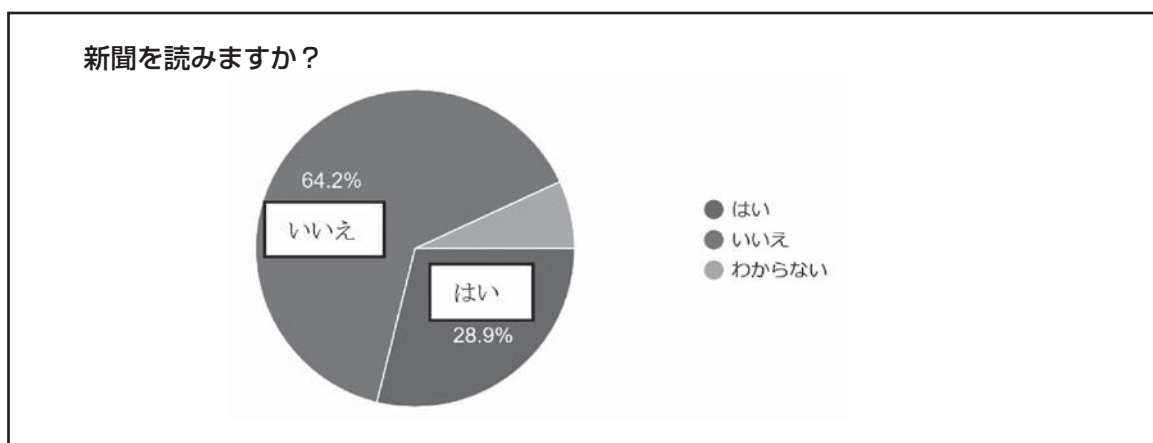
米子市立義方小学校 圓山 那穂

1 はじめに

本校は、2023（令和5）年度より2年間のNIE実践校としての指定を受けた。1年目となる2023年度は、児童の実態を知ることから始め、新聞との関わりや、文字を読むことについての意識調査を実施した。また、本校は全学年で活用力の育成を目的とした一斉テスト（国語・算数）を毎月実施しており、読むことや書くこと、説明することに必要な力を、6年間を通して積み上げている。NIEの実践も、その一助になるのではないかと考えた。

2 児童の実態

NIEの取り組みを始めるに当たって、本校の児童3～6年生を対象にアンケートを実施した。結果は次の通りである。

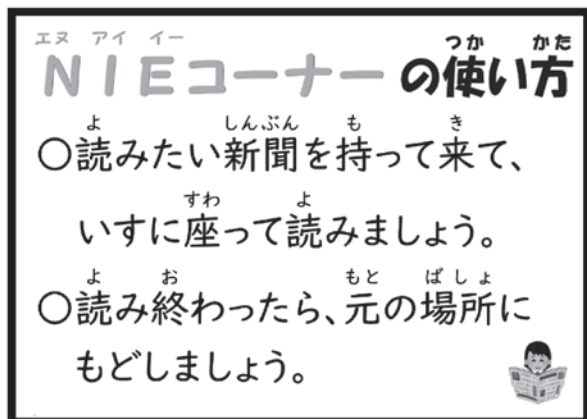


このように、「新聞を読む」と答えた児童は28.9%、その中でも「毎日読む」と答えた児童は17.1%、「休みの日だけ読む」と答えた児童は31.4%であった。そこで、まずは新聞に慣れ親しむことを目指し、学年に応じた様々な取り組みを行うことにした。

3 実践の概要

(1) NIEコーナー

特別教室の一面に「NIEコーナー」を設置し、休憩時間等に自由に新聞を読むことができるようにした。



新聞社ごとに新聞を並べ、興味に応じて読み比べられるようにした。同じ日の新聞でも、一面に取り上げている記事が違っていたり、同じ事柄を取り上げた記事でも、見出しや写真、文章の内容が違っていたりすることに気付くことができるようにした。NIEコーナーについては、校内放送で紹介し、全校に周知した。興味をもった児童が足を運び、新聞を手取る姿が見られた。また、過去の新聞もストックしておくことで、教師が学習教材として使用できるようにした。



(2) 文字探し・言葉探し・見出し探し（1～3年生）

1年生では、新聞記事の中から、学習して読めるようになったカタカナと漢字を見つけ、丸をつける活動を行った。カタカナや漢字を学習してすぐの1年生は、新聞に載っている多くの文字の中から、自分に読めるものを見つけていくことに、とても喜びを感じていた。どの児童も、集中して活動に取り組み、読めるようになった文字の数を確認していた。

また、2年生は、1年生より少しステップアップし、文字探しに加えて言葉探しに取り組

んだ。新聞に載っている文章の中から自分の知っている言葉を探し、印をつけていった。「こんな言葉が載っていたよ」と見つけた言葉を友達に伝える姿も見られた。



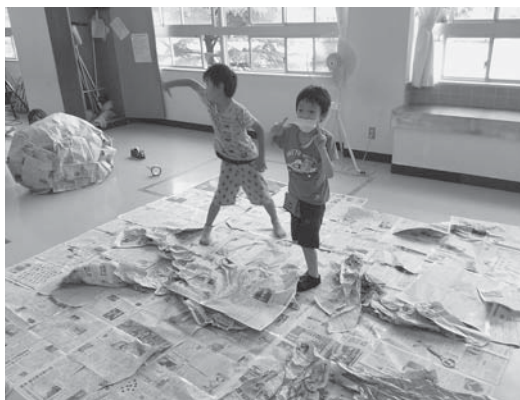
さらに、3年生では、文字探し・言葉探しに加えて見出し探しに取り組んだ。3年生の発達段階では、既習漢字の量や読解力などの点から、記事の内容を自力で読み解くことは難しい。しかし大きなサイズになっている見出しを読むことは可能である。そこで、一人一日分の新聞を配布し、自分が興味をもった見出しに印をつけた。すると、自然に「こんなことが書いてある」と見つけた見出しを友達に紹介し始めた。また、見出しだけでなく、写真からも情報を読み取ろうとする児童の姿も見られた。これらの活動が新聞に興味をもつきっかけとなり、自主学习でも、新聞記事を切り抜き、文字探し等に取り組む児童も現れた。



このように、文字探し（1年生）→言葉探し（2年生）→見出し探し（3年生）などと、段階を追って文字や言葉を見つける活動に取り組んだ。

（3）新聞となかよし（2年生）

2年生の図工「新聞となかよし」では、新聞を使って造形遊びの学習に取り組んだ。新聞を床一面に敷き詰めたり、大きな玉にしたり、スティックにしたり、服の一部にしたり・・・形を自由に変えることのできる新聞の特性を生かした活動となった。児童達は、思い思いに新聞を使って楽しんでいた。



（4）朝新聞（4年生）

4年生では朝新聞の活動に取り組んだ。登校後に行っている朝読書の時間を利用して、その日の新聞を一人一人が手に取り、記事を読んだ。一面を読む児童、スポーツ欄を読む児童、赤ちゃん紹介のコーナーを読む児童、それぞれに興味をもった記事を選んで真剣に読んでいた。



（5）NIEワークシートの活用（4年生・6年生）

NIEのウェブサイトに掲載されているワークシートを活用した。小学生の児童に合わせて情報量が抑えられており、更に児童が興味をもちそうな記事を題材として扱っているため、読んだり書いたりすることが苦手な児童も、抵抗なく取り組めた。



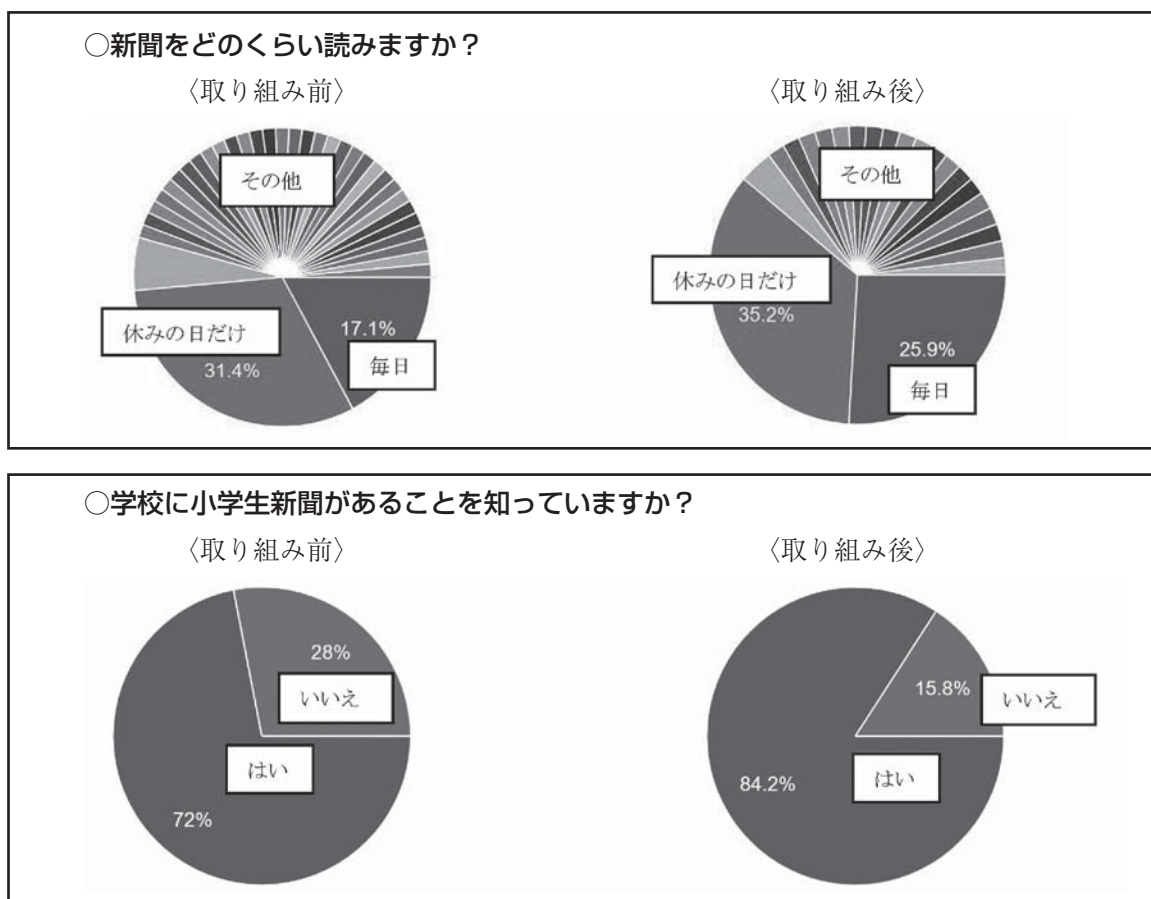
（6）新聞記事を書こう（5年生）

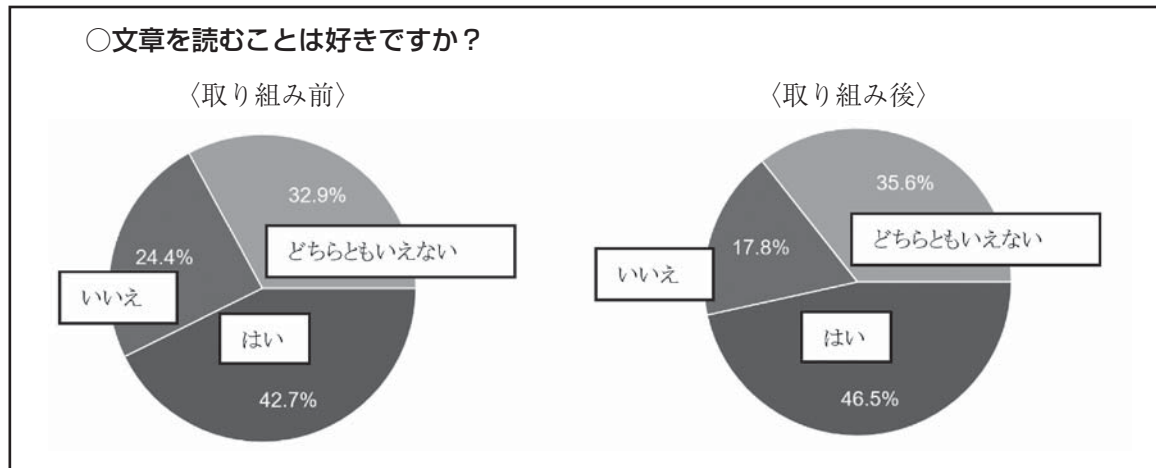
5年生の国語「書き手の意図を考えよう」では、同じ事柄を扱った別の新聞社の記事を読み比べ、見出しやリード、文章、写真、に焦点をあてながら、書き手の意図を読み取っていく。この単元に合わせて、新聞社からゲストティーチャーを招き、新聞づくりの手法を学んだ。そして、学習後には児童自らが新聞記者となり、学校についての新聞記事を書き、実際の新聞に掲載されることとなった。児童は新聞づくりの課程を学ぶと共に、国語の学習を生かしながら、意図が伝わるように見出しや写真を選ぶことができた。



4 成果と課題

1年間の成果と課題を振り返るために、児童にアンケート調査を行い、NIEの取り組み前後の結果を比較した。





NIE 1年目の取り組みとして、新聞に親しむことを目標に掲げ実践を重ねた。その結果、「新聞を毎日読む」と答えた児童の割合は17.1%から25.9%、「学校に小学生新聞があることを知っている」と答えた児童の割合は72%から84.2%となり、共に数値が上昇した。さらに、「文章を読むことは好き」と答えた児童の割合は42.7%から46.5%と上昇した。

このことから、1年間実践を重ねたことにより、新聞に親しむことができたと言える。また、新聞に親しむことにより、文章を読むことへの抵抗感もある程度減少したのではないかと考えられる。

今後の課題として、本校の校内研究でもあるICTとの関連が挙げられる。児童が一人一台端末を持って学習に臨んでいる現状も踏まえ、NIEの取り組みもICTを土台としたものとなるように、実践を深めていきたい。

鳥取中央育英高等学校の取り組み —図書館からの実践として—

鳥取県立鳥取中央育英高等学校
司書主任 前田 久美子

1 はじめに

本校は2023（令和5）年度に実践指定校に認定された。これまでも、前身の由良育英高等学校時代を含め数回実践指定校に認定されてきているが、今回は2007～2008（平成19～20）年度以来の、15年ぶりの実践指定校への認定となった。

2 図書館を拠点としたNIE実践

実践指定校のお声掛けをいただいたきっかけが後述の新聞活用LHRであり、その企画・実践の中心となっていたのが司書である私だったことにより、本校は司書が実践代表者を拝命することになった。授業実践の主体になることがない、ましてや学校教育の専門家でもない者が実践代表を務めることには大きな不安があったが、「高校図書館に勤務している図書館の専門職としての立場で、できそうだと思うことに少しずつでも取り組んでいこう」という思いで取り組みを進めた。

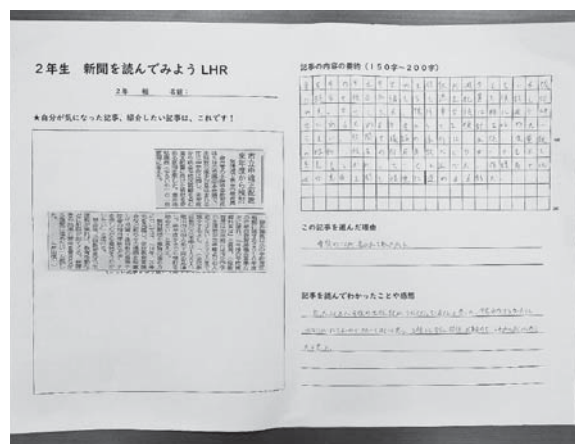
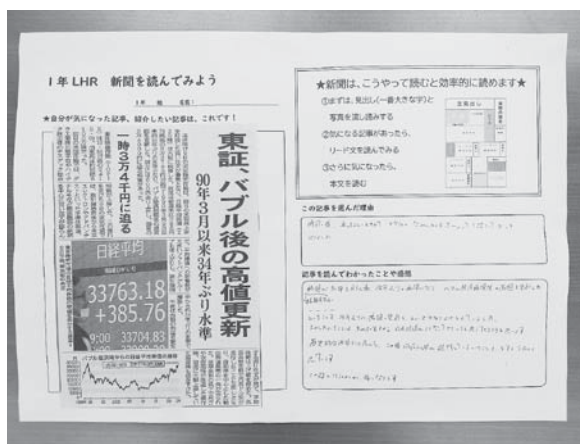
3 実践の概要

（1）新聞活用LHR（全学年対象）

2022（令和4）年度、本校の生活時間の改定に伴い、朝のSHR前に実施していた10分間の朝読書が廃止された。それに伴い、読書活動推進と情報活用能力の向上を図る目的で、同年度より全学年・全クラスを対象に「図書館活用LHR」と「新聞活用LHR」を新たに設定し、年数回実施することとなった。

「新聞活用LHR」は、普段あまり手に取ることがない新聞を通して時事問題や地域の話題等に触れることを目的として実施している。2023（令和5）年度は1・2年生は各クラス1回ずつ、3年生は各クラス1学期に1回・2学期に3回の計4回実施した。3年生については2学期に入試や就職試験等の進路に関する動きが本格化することに伴い、実施回数を増やしている。

事前に実施日を新日本海新聞社中部本社に伝え、最寄りの大栄販売店から当日朝に当該学年の生徒・教職員分の当日分の日本海新聞本紙を届けていただき、クラス毎にワークシートとともに配布し、担任主導で実施している。まずは新聞本紙に一通り目を通してもらい、気になった記事を選んでワークシートに貼付、内容の要約及び感想等を記入する形式である。記事選びや要約に苦戦することもあるようだが、新聞を活用したインプット及びアウトプット作業を実践する好機となっている。



1年生向けは記事内容の要約なし・新聞の読み方説明あり 2・3年生向けは要約あり

（2）生徒玄関に新聞設置・「本日の一面」掲示

実践指定校への新聞7紙の無償提供を活用し、提供を受けていた10月から翌年1月の間、生徒玄関横に専用のラックを設け当日の新聞を設置し自由に閲覧・読み比べができるようにした。

また、当日の各紙の一面上半分をカラーコピーしたものを合わせて掲示し、時間がない中でも通りすがりに一面トップの記事を気軽に確認できるようにした。

生徒玄関は生徒が一日に数回は確実に通る場所なので、特に一面の掲示については生徒たちが思いのほかよく見ている様子が見受けられた。中でも入試を控えた3年生が総合型入試の面接等の時事問題対策のため日々内容を確認しているとのことだった。教職員からの評判も上々で、ずっと続けてほしいとの声も寄せられた。



生徒玄関の当日分新聞の設置・掲示の様子



（３）授業の中での実践

・現代文講読（３年・国語）

新聞活用LHRと同様の形式でワークシートを準備し、同じ日の同じ内容の記事について数紙を読み比べてまとめたり、北海道新聞社が提供している「道新でワークシート」を活用させていただき新聞記事の内容の要約、設問を解く等の取り組みを実施した。

・保健（２年・保健体育）

健康づくりやスポーツ等、テーマを決めて記事を紙面より選び、新聞活用LHRと同様の形式で準備したワークシートにまとめ、各班内で紹介し合う取り組みを実施した。能登半島地震が発生したことにより、防災活動等についての記事を取り上げることもあった。



2年保健 テーマに沿った記事を選びワークシートに記入

（４）１年生「読書教室」

本校では、読書活動等の意義を今後の高校生活の中で自己実現や進路実現に効果的につなげていくことを目的に、１年生を対象に毎年「読書教室」という図書館主催の行事を実施している。2023（令和5）年度は、本校がN I E実践指定校になったことを受け、新聞活用を通して読解力や情報活用能力の向上を目指した内容で10月25日（水）6限に実施した。

当日は新日本海新聞社の岡村博読者センター長、県N I E推進協議会の和田進事務局長（いずれも当時）を講師にお迎えし、新聞の役割や各面の構成と特徴、時間がないときでも新聞に親しむコツ等を伺いながら、全員に配布された当日分の日本海新聞本紙を実際に読んで確認し、各々の学びを深めた。後半には生徒や教職員による質疑応答も活発に行われ、終了後は取材に来られていた記者の方と１年生の新聞部員が取材がてら語り合う場面もあり、生徒・教職員ともに学ぶことの多い有意義な取り組みとなった。



講演の様子



実際に新聞を広げて記事構成等を確認

(5) その他

・鳥取県高等学校図書館教育研究会中部支部研修会

かねてより学校における新聞活用については幾度となく話題に上っており、研修の機会を求める声も寄せられていた。そこで、10月26日（木）に、鳥取県図書館教育研究会の中部支部の研修会として、県中部の高等学校の司書、司書教諭、図書担当教員を対象とした新聞およびNIE活動の効果的な活用についての研修を実施した。

当日は県NIE推進協議会の藤田安一コーディネーター、和田進事務局長（当時）を講師としてお迎えし、新聞の活用方法やNIE活動についての事例についてご教示・ご紹介をいただいた。中でも、高校生の主権者教育に関わる新聞活用については活発な質疑が展開され、「『社会の窓』である新聞を読めば、社会に興味を持つことができる」との藤田コーディネーターの言葉が印象に残った。

また、研修会後に早速、自校の教員に授業での新聞活用について提案した司書もあり、今回の取り組みが図書館からの新聞活用への発展につながった。



・これまでに図書館で継続していた実践

実践指定校になる前にも、図書館では本校に関する全ての新聞等の記事及び北栄町に関する主な新聞記事については収集・保存し、本校関連記事については図書館前の専用掲示板に掲示をしていた。

特に各種大会・試合の結果や講演会等の学校行事に関する記事は生徒や教職員の関心も高く（記事になる前に「取材を受けた」と教えてくれる生徒や先生もいる）生徒たちに新聞を身近に感じてもらう大きなきっかけ作りになっているのではないかと思う。



本校関連記事の専用掲示板（図書館前）

また、本校は探究活動を「地域探究」として位置付け、本校の所在地である北栄町や隣接した琴浦町を中心とした地域の諸課題についての探究活動を実施している。したがって、活動の中で地域に関する新聞記事の活用は欠かせない。

現在は図書館で記事収集・保存をして求めに応じて提供しているが、今後は記事を活用した情報発信を実施し、生徒の地域に関する興味関心を高めることができればと思っている。

4 成果と課題、次年度に向けて

最近では新聞を購読している家庭が減少し、高校生は日常的に新聞に接する機会が減少している。その中で、全ての学年に対して新聞に触れる機会を複数回設けることができ、生徒たちに新聞の持つ社会的役割や情報収集・活用における利点を感じてもらうことができたのはよかったと思う。

しかし、他の教職員との連携協力が不十分なところもあったので、次年度はより多くの教職員の協力を得て、もっといろいろな取り組みに着手していきたい。

鳥取西高等学校の取り組み —社会とつながるNIEを目指して—

鳥取県立鳥取西高等学校
中野 美紀

1 はじめに

日々の学習を社会課題に結びつけて考え始めた時、それはより深い学びをもたらす。その際、社会事象や社会問題を解説し問題提起している新聞は、生徒の思考を刺激する教材として最適だと考えている。NIE実践指定校2年目となる令和5年度も、担当する国語科の授業だけでなく、LHRや講演会、課題研究といった様々な場面でそれらの内容に合わせた記事を用い、考えるきっかけ作りや異なる論点の提示等に活用した。

今年度の中心的テーマは「民主主義と政治」であり、実践にあたっては生徒の目が社会に向けられるよう、学校の外とのつながりを意識した。大きな柱として、県内各新聞社・通信社のご協力のもと実現した「ゲストティーチャー授業」と「社会への発信（新聞投稿やコンクール応募）」が挙げられる。昨年度以上に連携が拡大し、校内外ともに多くの協力が得られたのは大変ありがたいことだった。

年間の活動は、以下のとおりである。

令和5年度

月	内 容	
4		
5	第1回ゲストティーチャー授業 新聞投稿	国語科授業 （単元内容に 応じた新聞 記事の活用） 及び 公民科授業 （単元内容に 応じた新聞 記事の活用）
6	人権教育LHR 新聞投稿	
7	新聞感想文コンクール いっしょに読もう！新聞コンクール	
8		
9	シンブリオバトル	
10	主権者教育 課題研究LHR	
11	保健LHR 新聞投稿	
12	第2回ゲストティーチャー授業	
1	人権教育LHR	
2		
3	新聞投稿	

2 実践の概要

（1）国語科

①主権者教育の前段階として

選挙権年齢が18歳以上になったことに伴い、高校生も主権者として権利を行使する機会が生じる。高校生たちから多く寄せられたのは、そもそも投票するための知識、つまり社会問題や候補者の考え・方針に関する知識が不十分で選ぶ自信がないという声である。世の中の出来事を知る入り口として新聞は最適だが、新聞よりもインターネットやSNSの方が身近だと言う生徒たちの意見、また一方ではフィルターバブルやフェイクニュースが問題となっている現状を踏まえ、まずインターネット（ネットニュース）と新聞の違いや活用法を知ることから始めたいと考えた。その取り組みが、第1回ゲストティーチャー授業である。

○第1回ゲストティーチャー授業

ー「新聞やネットニュースとの上手な付き合い方」を学ぶー

令和5年5月22～25日にかけて、「現代の国語」で1年生全7クラスを対象に、県内各新聞社・通信社の支局長や編集局長によるゲストティーチャー授業を行った。単元目標は、①新聞やネットニュースの作り方を理解する②新聞やネットニュースの効果的な活用方法を考える、の二点とし、事前にネットニュースの発信方法とフィルターバブルについて学習した上で（関連記事「情報偏食ゆがむ認知」2023年2月1日・3月30日読売新聞等を使用）、ゲストティーチャー授業に臨んだ。

当日の授業では、新聞とネットニュースのそれぞれの特徴や新聞が手元に届くまでの過程、分かりやすく伝えるための紙面の工夫、新聞を効果的に読むポイント等を学んだ。

また、学校図書館司書の協力により、図書館特設コーナー「新聞って面白い！」が設けられた。記者の仕事の内実に迫る『新聞記者』や航空機墜落事故取材に奔走する新聞記者の姿を描いた『クライマーズ・ハイ』、『時代の空気。副田高行がつくった新聞広告100選。』など、様々なジャンルの本が紹介され、生徒たちが興味を持って手に取ったり借りていたりする姿が見られた。

【日時・クラス・担当者】

①5月22日（月）1年6組

担当：読売新聞社 樽本安友氏（大阪本社鳥取支局長）

②5月23日（火）1年2組

担当：産経新聞社 松田則章氏（大阪本社編集局地方部鳥取駐在支局長）

③5月23日（火）1年4組

担当：山陰中央新報社 福岡崇広氏（鳥取総局長）

④5月24日（水）1年1組

担当：毎日新聞社 阿部浩之氏（鳥取支局長）

⑤5月25日（木）1年5組

担当：共同通信社 林奈緒美氏（鳥取支局長）

⑥5月25日（木）1年7組

担当：朝日新聞社 吉田博紀氏（鳥取総局長）

⑦5月25日（木）1年3組

担当：新日本海新聞社 井上昌之氏（執行役員編集制作局長）



授業の様子



図書館の特設コーナー

〔授業後のアンケート結果の一部について〕

授業前にも新聞やネットニュースを読んでいた生徒は60%で、そのうちの3割が今まで以上に見る回数が増えたと回答した。また、今まで読んでいなかった生徒40%のうち、その8割弱が新聞やネットニュースを読むようになったと答えた。ニュースに触れるという面で一定の効果が認められた。

また、興味関心の深まりや面白さについても、61%が「大変興味深く面白かった」、36%が「大体興味深く面白かった」と述べている。

〔授業後の生徒の声〕

- ・正しい情報かどうか、常に疑いながら情報を得ていくことの重要性について分かった。
- ・どの情報が正しいのか正しくないのかを見定めるには、情報の元を調べる必要があるとわかった。自分の生活の中でもそれを意識して情報を上手く活用していきたい。
- ・新聞とネットニュース、それぞれの良さが分かった。新聞は長いし、なかなか今まで読んでこなかったけれど、朝食の時に読むようになった。一面や興味のあるところだけでもいいんだと思うと、読みやすかったし、世の中の流れも分かるようになった。
- ・毎日作られている新聞にこんなにも手間がかかっていることを改めて知り、もっと新聞を読もうと思った！新聞はその場で読めなかったら取っておくことも、切ってどこかに保存することもできて、そう考えると大きな良さがあると改めて分かった。
- ・コタツ記事といわれる、裏どりをしていない記事もあり、それが正しいとは限らないので、すぐに信じるのではなく、他の記事と比べたり実際に自分で調べたりして、しっかり考えて情報を取り扱っていきなさいと思った。
- ・まず、ネットニュースがいくつかの新聞及び情報機関の記事を集約したものだったことに驚いた。また、信憑性のある情報の取捨選択の仕方など、これからの課題研究に役立つ知識も得られて、とても有意義な時間だった。

②「民主主義と政治」と主権者教育

「現代の国語」では、テーマを関連づけながら「〈私〉時代のデモクラシー」（宇野重規）、「来るべき民主主義」（國分功一郎）、「会話と対話」（長田弘）、「ポスト真実時代のジャーナリズム」（国谷裕子）と読解を進めた。

まず、〈私〉という個が重視される時代に〈私たち〉を形成し、〈私たち〉として問題を解決するのは困難になりつつあること、次に、そもそも政治とは多数の見解を一つに決定するという原理的困難を内包しており、カール・シュミットによると政治は「敵と友」の区別によって定義されると知った。（例として「島根原発 来年8月再稼働」2023年9月12日日本海新聞・中国新聞、「外国人材が必要86% 自治体『消滅』強い危機感」2023年9月17日日本海新聞等の記事を使用）しかし、時と場合に応じた思慮分別を生み出す「対話のもつちから」は、「敵と友」の関係を乗り越える一つの方法になりうるということを考えた。（「紛争下の寛容 民族を超えて」2022年5月17日朝日新聞等の記事を使用）そして、社会的対話を行うには社会課題を理解し、考えるための情報を得ることが必要だが、客観的事実や真実より自分の感情に寄り添う情報の方を信頼してしまう「ポスト真実時代」への警告について学んだ。

その過程で、「ポスト真実」の実態は本当に自分自身にもあてはまるのか、筆者の国谷氏はその傾向にジャーナリズム自体が迎合してしまうことへの危惧感を抱いているが、現場も同様に感じているのか等の疑問が生じ、それらを報道現場におられる方々に実際にお聞きしようというのが、第2回ゲストティーチャー授業である。

○第2回ゲストティーチャー授業

ーゲストティーチャーと「ポスト真実時代」を考えるー

令和5年11月28日～12月6日にかけて、「現代の国語」で1年生全7クラスを対象に、2回目のゲストティーチャー授業を行った。単元目標は、①論点を共有し考えを広げ深めながら、深掘り質問を工夫する②情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を深めることの二点である。「ポスト真実時代」の学びの中で抱いた自分たちの疑問とそれに対する自分たちの考えを事前に練り上げ、当日はゲストティーチャーとの質疑応答形式で行った。

【日時・クラス・担当者】

①11月28日（火）1年7組

担当：産経新聞社 松田則章氏（大阪本社編集局地方部鳥取駐在支局長）

②11月29日（水）1年3組

担当：共同通信社 林奈緒美氏（鳥取支局長）

③11月30日（木）1年2組

担当：朝日新聞社 吉田博紀氏（鳥取総局長）

④12月1日（金）1年5組

担当：読売新聞社 細野直人氏（大阪本社鳥取支局長）

⑤12月5日（火）1年6組

担当：毎日新聞社 阿部浩之氏（鳥取支局長）

⑥12月6日（水）1年1・4組

担当：新日本海新聞社 井上昌之氏（執行役員編集制作局長）

【学習指導案】

- 1 授業 現代の国語
 2 対象 1年全クラス（40名×7クラス）
 3 日時 令和5年11月下旬 45分
 4 場所 鳥取西高校1年各教室
 5 単元名 「ポスト真実時代」を考える
 6 単元目標

- ①論点を共有し、考えを広げたり深めたりしながら、
 話合いの目的、種類、状況に応じて、表現や進行など、
 話合いの仕方や結論の出し方を工夫する。（話すこと・
 聞くこと）
 ②情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について理解を
 深める。（知識及び技能）

7 指導計画（全6時間）

第一次（第1～4時）

（1）「ポスト真実時代のジャーナリズム」を読む

- ・民主主義を遂行するために。（前回の学習の振り返り）
- ・「ポスト真実の時代」とはどのような時代か。
- ・「ポスト真実という言葉の誕生は（略）ジャーナリズムにとって深刻な事態」であるのはなぜか。
- ・「社会に起こっていたのは、経済格差の拡大と、それがもたらす不公平感の高まりだ。そのことと、自らが共感できる、感情が一体化できる情報だけを取り込み、異質なものは排除していくというポスト真実の流れは、無縁とは思えない。」と筆者が言うのはなぜか。
- ・ポスト真実の流れは「伝える側の人間」にどのような姿勢の変化をもたらすと筆者は危惧しているか。
- ・「異質なものの、自分とは異なる人や思想に出会う」ために、具体的にどのようなことをしていくべきか。

（2）「ファクト」と「フェイク」について考える

- ・ファクトとフェイクを見分ける視点を学ぶ。
- NHK高校講座「現代の国語」動画の一部を利用

第二次（第1～2時）

（1）ゲストティーチャーと「ポスト真実時代」を考える

- ・生徒による質問形式。

（2）前時の振り返り

- ・授業を振り返り、400字で意見・感想をまとめる。

授業は、各クラス様々に展開された。生徒からの質問は「記事の信頼性を示す工夫は何か」「共感できる情報ばかりに偏らないようにするには」「取材で深い情報を聞き出すために大切なことは」「戦場など危険な現場での取材はAIに任せてはどうか」など、多岐にわたった。

ゲストティーチャーと「ポスト真実時代」を考える
 （ 組 番 名前 ）

1 ゲストティーチャーの紹介

2 授業の流れ
 (1) 本時の目標確認
 ①論点を共有し、考えを広げ深めながら、深掘り質問を工夫する。
 質問に対する答えを聞いたうえで、さらなる質問を繰り返そう。

「～ということについて、それはなぜですか。」（理由や根拠を深堀り）
 「～というお話について、〇〇の部分をもっと詳しく教えてください。／具体的にどのような
 例がありますか。」（詳細について深堀り）
 「～について私は〇〇と思ったのですが、先生はどうお考えになりますか。」（自分の意見、感
 想について深堀り）
 「～に関して、他に〇〇の点についてはどうでしょうか。／反対に〇〇ならどうでしょうか。」（他
 の視点、反対の視点から深堀り）

②情報の妥当性や信頼性の吟味の仕方について、理解を深める。

(2) 質問会
 ・ゲストティーチャーに質問する。（各グループの代表者）
 ・質問に対する答えを聞いて、深掘り質問をし、質疑応答を続ける。（全員）
 ・質問内容によっては、自分たちならどう考えるかグループで話し合い、発表した上で、質問する。

(3) 謝辞

(4) 本時の振り返り
 ・アンケートフォームに入力する。

3 質問に対するゲストティーチャーの回答をメモしよう

質問内容（ ）
 回答（ ）

表へ

ワークシートの一部

言葉は違って各ゲストティーチャーが共通して述べたのは、まず新聞は「事実」を報道しており（「真実」はその人の見方によって様々だとも言える）、その情報を裏付ける根拠が最も大切であること、また簡単に物事をうのみにしないで常に疑いを持つ姿勢（見えるものだけでなく背景を見る、分かりやすすぎる・勇ましすぎる・皆同じであることを疑う、受け手も情報の分析者であること）が求められるということだった。

さらに、共感はずしも必要ではなく、異なる考えを知ることには価値があること、記事は記者の思いや使命感があってこそ成立し伝わるもので、完全な客観や中立はないのではないということ、取材にあたっては謙虚さが最も大切であること、物事を俯瞰する目と詳細を見抜く目である「鳥の目、虫の目」を持つこと、同じ物事も世代によって異なる視点でとらえられるので、世代を超えた交流が必要であること、小さな疑問をどんどん口に出すことや答えのない問いを考え続ける姿勢を持つことの大切さといった、今後の人生においても重要な示唆をいただいた。

ゲストティーチャーの皆さまには、単純には答えられない問いに対しても、ご自身の信念や思いを込めて丁寧に答えていただいた。様々な経験を経てこられたからこそ生み出される重みのある言葉によって、教科書本文の読解だけにとどまらない大変深い学びとなった。



授業の様子

〔授業後のアンケート結果の一部について〕

授業の学びや面白さについて「大変面白く興味深かった」64%、「大体面白く興味深かった」32%で、ほとんどの生徒が意欲的に取り組むことができた。また「今後の探究学習や意見文作成等に役立つ」に関しては、ほぼ100%が役立つと回答した。

〔授業後の生徒の声（一部抜粋）〕

- ・物事を俯瞰し、質問を投げかけながら情報を受け取ることの大切さも学んだ。「なぜ」と常に問いかけることによって根拠の有無や事象の真偽が見え、新たな真実の発見やより深い理解につながると知った。
- ・偏った考えにならないために、自分とは異なる世代の人の意見を聞くと良いという話も伺った。新聞を読み、答えの出ない問いについて考え、様々な世代の人と意見交換をしてもう一度自分で考える、という流れを作ることができれば、より自分の考えが深まり、多様な見方も身につくと思う。

- ・「それぞれ自分とは違う存在を確認できれば、その意見に共感しなくてもいい」という言葉が印象的だった。私は自分と違う意見に出会うと、まず否定してしまうことがよくあった。しかし、一番大切なのは否定で終わることではなく、それを受けて自分とは違う存在を認識することなのだったと思った。
- ・「知る権利」の範囲の曖昧さは、社会的対話を必要としていると思った。今の社会は話題性が重要視される傾向にある。その中で人々が本当に知るべき情報は何か、それを深く考える機会になった。
- ・より深く理解するためにどんな質問をすればよいのか考え、自分は今何が分かっていないのかを自分に問うことで、考えを広めることができたと感じた。

③表現活動

○第15回 いっしょに読もう！新聞コンクール

1年生は、他者との意見交換をとおしてものの見方を広げることを目標に、日本新聞協会主催の新聞コンクールに取り組んだ。新聞は4～7月の各紙（鳥取県N I E推進協議会提供分、図書館設置用等）をクラスに持ち込み、次々に手に取って読みながら各自の興味関心に応じて記事を選んだ。友人との議論にとどまらず、家族と話し合った生徒も多かった。



新聞記事を読む様子



奨励賞受賞

○シンブリオバトル

新聞コンクールで取り上げた記事を使い、シンブリオバトルを実施した。シンブリオバトルとは、お薦めの記事を紹介しあい、聴衆が最も関心をひかれた発表を選出するもので、本のビブリオバトルの新聞版である。

限られた時間内で記事の魅力を伝えるために最も伝えたい点を厳選し、聴衆への表現の仕方を工夫（問いを投げかける、最初にキーワードを示すなど）した上で、数回の個人練習を経て本番に臨んだ。話す技術の向上とともに、グループやクラスで感想を述べ合うことで、新たな発見や考えの深まりがあったことが、生徒の感想からうかがわれた。

〔授業後の生徒の声〕

- ・グループに同じ「ふるさと納税」の内容で別の新聞を用いている人がいて、ふるさと納税の課題の取り上げ方が違うことが分かった。解決方法にも別の視点があるのかなと思った。

- ・自分が興味を持たないような記事でも発表を聞くと、他の人の伝え方の影響で興味が出てきた。テレビで流れているニュースでも印象に残るものと残らないものがあるので、その違いは伝え方にもあるのか気になった。



シンプリオバトルの様子

○新聞への投稿

5月は新型コロナウイルス感染症が5類に移行し、訪日観光客の増加が見込まれる状況を踏まえ、「外国人観光客どう増やす」をテーマに800字意見文に取り組んだ。

6月は単元の発展学習「AIと人間の境目」として、複数の新聞記事を読んでAIを巡る社会情勢についてグループディスカッションをした後、自分の考えを400字にまとめた。

11月は「民主主義と政治」を巡って、若者の政治参加や主権者意識、またSNS時代の民主主義のあり方などについて、400字意見文を作成した。

3月は「食べることの哲学と臓器移植」を学んでの意見、また一年間の学習を振り返っての所感をまとめた。

今年度の新聞投書、コンクールへの応募は、対象生徒・回数ともに昨年以上に拡大し、生徒は自分の意見を社会に発信する喜びや達成感を得ている。生徒の投書に言及した大人の投書（高校生の考えへの賛同）もあり、自分たちの意見が世の中に受け止められたという自己肯定感につながった。書くことへの抵抗感はほとんど感じられず、むしろ次は自分が選ばれたいという積極的な姿勢が見られた。意見文を読み合って他の良い点を学び取り入れるといった、文章表現の技術向上の面でも効果があった。

（2）公民科

①授業（一例）

「公共」では、北極海の利用に関する国際ルールの確立に関する社説記事（「国際ルールの確立が急務だ」2021年6月30日読売新聞）を参照し、「法の支配」とは何かを考えた。

また、「政治・経済」では、国連安全保障理事会の常任理事国入りを目指す日本について、社説（『法の支配』徹底へ結束を図れ」2023年1月14日読売新聞）を参照しながら賛否を論じたり、ドイツの東西格差について新聞記事（「ドイツ東西格差今も」2020年10月2日読売新聞）を読み自分の考えを述べたりした。

さらに「倫理」では、各自が担当する記事（「権利拡大 求められる責任」2022年3月31日産経新聞等）に書かれている18歳成人のメリット・デメリットをまとめ、18歳成人についての賛否を800字以内で論じた。

②表現活動

○第9回日本海新聞・児童生徒新聞感想文コンクール

2年生は、公民科の夏季休業中課題として、興味関心を持った記事の一つを選び、感想を1200字以内にまとめた。

最優秀賞をはじめ、優秀賞2名、優良賞3名、優秀学校賞を受賞した。

（3）LHRでの実践

①人権教育LHR

1年では前期は「いじめ」、後期は「障がい者の人権を巡って」をテーマに、それぞれ関連記事（「『いじめ』で追い詰められた心」2023年4月20日朝日新聞、「くらしの相談室『SNSによる子どものいじめ』」2023年4月27日日本海新聞、「#『普通』をほどく 手話通訳をコンサートに」2023年12月24日毎日新聞等）を用いた人権教育を実施した。

2年では「部落差別」について、関連記事（「記者28歳『私は部落から逃げてきた』」2022年4月19～26日西日本新聞）も利用しながら考えを深めた。

3年ではジェンダーを巡る問題をテーマに、関連記事（「固定観念が生む男女格差」2021年4月29日朝日新聞、「男性警察官進む育休取得」2023年4月9日産経新聞等）を参照しながら議論した。

②1年課題研究LHR



Chromebook で記事を読む様子

各々の課題研究を進めるにあたり、情報や検索の知識を広げることを目的にLHRを実施した。紙媒体とインターネットにおける情報の速報性、正確性、蓄積性を確認した後、検索のポイントとして論文検索のC i N i i や新聞記事DBについて学び、実際にDBで検索する授業を行った。

③1年保健LHR（多様な性のあり方について学ぶ講演会）

多様な性のあり方についての講演会の補足として「県独自『パートナーシップ制度』10月から運用開始へ」（2023年8月9日日本海新聞）、「同性パートナー扶養認めず 札幌地裁初判断」（2023年9月12日日本海新聞）、「性別変更手術『違憲』」（2023年10月26日毎日新聞）といった記事を読みながら、性を巡る世の中の動向を知り、自分との関わりを考えた。

（４）校内での新聞掲示

各分掌・教科等に関する記事や生徒の受賞記事等を掲示し、生徒の意欲喚起に努めている。また、図書館では学習テーマや行事に関連した新聞記事や図書資料を随時展示している。事務室前においても、各種大会やコンクール、部活動での生徒の活躍、本校に関する記事を来校者にも見ていただけるよう掲示している。

３ 成果と課題

実践の成果は、テーマに対する自身の疑問を出発点として社会一般の具体的な場面・現象に押し広げ、そこからさらに自分との関わりに戻って考察するという「学びの往還」ができたことである。それに関して自分たちはどのような選択をし、行動していくのか考える過程で、主権者としての自覚も育まれた。

鳥取県教育委員会の調査（小学３、６年、中学３年、高校２年対象）によると、高校２年生の３５％が最近一か月に本を「まったく読んでいない」ということだ。（２０２４年４月２４日「令和５年度子どもの読書活動に関するアンケート調査結果について」）新聞についても、推して知るべしであろう。しかし、学びが点在で終わらず、有機的に結びつけられていったこれらの実践は、大学生や社会人になってからも、必要に応じて新聞を活用する素地になっていると思う。社会には簡単に解決しない問題が多々あるが、問題解決にあたっては、根拠に基づいた事実を明確にし、私たちに何ができるのか話し合う社会的対話が必要である。NIEはまさに実社会で起きている課題を理解し、解決に向けて思考する力を培う営みであり、投稿という手段で社会との対話を図ることも可能だ。生徒たちが複雑な社会を生き抜く力を育てていくことを願って、今後もこの取り組みを続けていきたい。

４ 終わりに

実践指定校としては区切りを迎えたが、今までの取り組みは鳥取県NIE推進協議会の皆さま、そして各新聞社・通信社の支局長・編集局長の皆さまのご尽力なくしては成立しなかった。皆さまのご声援に、心から御礼申し上げます。



日時

2023年 8月3日(木)・4日(金)

会場

愛媛県県民文化会館

主催／日本新聞協会

共催／愛媛県教育委員会、松山市教育委員会

後援／文部科学省、日本NIE学会、文字・活字文化推進機構、全国学校図書館協議会、愛媛県市町教育委員会連合会、愛媛県小中学校長会、愛媛県高等学校長協会、愛媛県教育研究協議会、愛媛県高等学校教育研究会、愛媛県私立中学高等学校連合会、愛媛県教育会、愛媛県メディア教育協会、愛媛県PTA連合会、愛媛県高等学校PTA連合会、松山市小中学校PTA連合会、日本教育公務員弘済会愛媛支部


主管／愛媛県NIE推進協議会、愛媛新聞社



8/3(木)

1日目 開会式・全体会・交流会

〈会場〉愛媛県県民文化会館

11:30	開場
13:30 ↓ 13:50	開会式 〈会場〉メインホール
13:50 ↓ 15:15	<p>記念講演 夏井いつき (俳人) 「いのちを守る ことばを育てる」</p> <p>1957年生まれ、松山市在住。俳句集団「いつき組」組長、藍生俳句会会員。第8回俳壇賞受賞。俳句甲子園の創設にも携わる。松山市公式俳句サイト「俳句ポスト365」、朝日新聞四国俳壇、愛媛新聞日曜版小中学生俳句欄（ジュニアえひめ新聞スマイルピント「集まれ 俳句キッズ」）、各選者。2015年より初代俳都松山大使。第72回日本放送協会放送文化賞受賞。句集「伊月集錦」、「亂筆から人生」、「今日から一句」等著書多数。</p> 
15:30 ↓ 15:40	基調提案
15:40 ↓ 17:10	<p>パネルディスカッション 「ICTでひらくNIE新時代」</p> <p>■コーディネーター 駕原進 (愛媛大学教育学部 教授)</p> <p>■パネリスト 今井互郎 (松山市立小野小学校教諭・日本新聞協会NIEアドバイザー) 小田浩範 (松山市教育委員会 松山市教育研修センター 指導主事) 新田航平 (愛媛大学教育学部附属小学校6年生) 野添美来 (愛媛CATVお客さま本部お客さまセンター) 大橋美香 (愛媛新聞社地域読者局読者部長)</p>
17:10 ↓ 17:20	次回開催地あいさつ
17:30 ↓ 18:30	<p>交流会 (希望者のみ) ソフトドリンク、スイーツ等をご提供します</p> <p>〈会場〉真珠の間</p>

8/4(金)

2日目 分科会・閉会式・全国NIEアドバイザー会議

〈会場〉愛媛県県民文化会館

※プログラムの一部は、調整する愛媛県身体障がい者福祉センターを使用します。

8:15	開場	11:00 ↓ 12:30	分科会 第2部
9:00 ↓ 10:30	分科会 第1部	12:45 ↓ 13:10	閉会式 〈会場〉メインホール
10:30 ↓ 11:00	休憩	14:10 ↓ 16:00	<p>全国NIEアドバイザー会議 〈会場〉真珠の間</p> <p><small>※日本新聞協会NIEアドバイザーのみ対象です。</small></p>

第1部(9:00～10:30)



ヒストリア小野「過去からつながる歴史ストーリー」
～葉佐池古墳の探究から地域の未来像を考える～

松山市立小野小学校 第6学年・総合的な学習の時間
【授業者】今井互郎 教諭(日本新聞協会NIEアドバイザー)



読み手の立場を超えて取り組む探究活動
～読者・記者・取材対象者 3者の視点で考える～

愛媛大学教育学部附属中学校 第3学年・総合的な学習の時間
【授業者】富永剛志 主幹教諭



一糸の雲を目指すNIE
～多様な視点でアプローチ 進路実現に繋げる探究活動～

愛媛県立松山北高等学校 第2学年・総合的な探究の時間
【授業者】松田達也 教諭ほか



紙×デジタル 全学年でスクラップ
～他者と関わり学びを深めるNIE～

西条市立古岡小学校・西予市立皆田小学校
【発表者】古岡小学校 杉野あかね 教諭ほか、皆田小学校 岩本千香 教諭



想いを精選 新聞づくりで自己表現力向上
～NIEを活用した人権啓発活動～

四国中央市立三島南中学校
【発表者】西田寿 教諭



社会へのまなざし 防災の視点
～探究的な学びを生み出す共有・協働型新聞活用～

愛媛県立宇和島東高等学校
【発表者】都築果林 教諭(令和4年度まで愛媛県立八幡浜高等学校で実践)



タブレットでNIE ～新聞社のデジタル教材最前線～

【コーディネーター】松山市立東中学校 山内孔 校長
【パネリスト】今治市立近見中学校 津古優樹 教諭(日本新聞協会NIEアドバイザー)、
朝日新聞社CSR推進部NIE事務局 白銀泰、北海道新聞社みらい教育推進室部長 仁木琢磨、
愛媛新聞社総務企画局次長兼地域ラボ推進室長 中井寛



新聞記事に隠された俳句を発掘する
「クロヌリハイク」ワークショップ

【講師】黒田マキ(クロヌリハイク創業者、本名・杉本恭=愛媛新聞エリアサービス石井南所長)
キム・チャンヒ(俳句作家、俳句雑誌「100年俳句計画」編集長)

第2部(11:00～12:30)



「言葉の力」を育むNIE

～一つ一つの言葉に思いを込めて 松山の魅力発信～

愛媛大学教育学部附属小学校 第3学年・国語、総合的な学習の時間

【授業者】幸島恭輔 教諭



NIE活動を通して行う生徒と地域の未来づくり

～次代の主権者として持続可能な町づくりを考える～

松山市立久谷中学校 第3学年・総合的な学習の時間

【授業者】瀧野裕子 教諭



新聞から学ぶ地域課題解決策

～普通科高校生が考えた特産品の知名度UPプロジェクト～

愛媛県立伊予高等学校 第2,3学年・総合的な探究の時間

【授業者】松本直美 教諭、山下千枝 教諭



確かで豊かな読解力と論理的な思考力の育成

～NIEと児童同士の対話を通して～

東温市立南古井小学校

【発表者】堀悠介 教諭



社会への関心を高め、自分の考えを表現できる生徒の育成

～長一い廊下でN-1グランプリやってみた～

内子町立内子中学校

【発表者】二上雅史 教諭



新聞を視覚障がい生徒の「生きる力」に

～誰一人取り残さない教育を目指して～

愛媛県立松山盲学校

【発表者】沖田栄江 教諭、尾崎芳枝 教諭



全教科制覇! 学校挙げてNIE

～教員の体制づくりとICT活用～

西条市立河北中学校・松前町立松前中学校

【発表者】河北中学校 工藤優介 教諭、松前中学校 三好奏子 教諭



新聞記事に隠された俳句を発掘する 「クロヌリハイク」ワークショップ

分科会 第1部 と同様の内容です。

クロヌリハイクについて
詳しくはコチラ



第28回NIE全国大会・松山大会に参加して

大会スローガン：ICT でひらくNIE新時代

(2023年8月3、4日・愛媛県松山市)

※所属・肩書は2023年度当時

記事から熟考する習慣大切に

■鳥取県NIE推進協議会会長 加藤 博和



夏井いつき氏の講演は迫力があった。100年後の俳句のために「今生きている私に何ができるのか」ー。夏井氏が出演されているテレビのバラエティー番組でのエピソードに笑いつつ、その影響力もあって俳句の垣根が低くなり、裾野は広がっていると実感する。「俳句甲子園」は、8月に松山市で決勝戦が行われ全国区だ。夏井氏の俳句の種まきは、花を咲かせ実を付け次の種を育んでいる。

正岡子規の里・松山市は「『ことば』を生かしたまちづくり」をされていると市長のあいさつで伺った。夏井氏は、言葉を使いこなす力や操る技術を身に付けるトレーニングに、俳句は合理的なアイテムであり、俳句“で”学ぶことを教育に取り入れてほしい。それが命を守ること、心を守ることにつながるからだと言われた。

「助詞」で俳句の表す情景や動きが変わる。「季語」は聴覚、触覚、嗅覚、味覚までも真空パックにした情報を内包し、季語を知ることは生々しい身体感覚を培っていくことなのだと言われた。

氏が俳句を“使い勝手のいい教材”と紹介したように、NIEも、言葉や社会を、自分の身体のこととして観察したり想像したり学び続けようとするトレーニングになり、命を守ることになる。そのため種まきを私たちに促すメッセージとして受け取った。

ICTで居ながらにして大量の情報にアクセスできる時代。だからこそ、記事や紙面から身体を使って熟考する習慣は大切にしたい。教育の役割でもあらう。

今大会で、隣県の鳥根のNIE推進協議会の参加者とも交流する機会が得られ、大いに刺激を受けた。新聞が結ぶ縁も、今後の本県の活動に生かしていきたい。

投句「愛媛来て ひねる頭と ポンジュース」



全国大会紙面

改めて新聞のよさを考える

■鳥取県N I E推進協議会アドバイザー 岩井 克之



学校では、1人1台タブレット端末を持つ時代となった。デジタルで新聞記事を児童生徒全員が共有し、疑問も検索エンジンで簡単に調べることができる。また、共同作業が可能で書き直しも容易なので、再構築しながら情報配信もしやすい。新聞を知らない子どもたちが増える昨今、デジタルは、N I Eの新たな窓を開いてくれる気がする。新聞のデジタル化は急務である。

一方、アナログの新聞はどうなのだろうか。新聞は情報の正確性だけでなく、幅広い情報を網羅している。子どもにとっても興味・関心のある記事がたくさんある。俳人の夏井いつき氏が講演で、「速度や利便性はネットにかなわないが、紙の新聞は物事をゆっくり熟読する時間を与えてくれる」と述べた。「言葉の力」をより実感できるはずだ。

生成A Iが進化しても、自ら考える力や想像力・発想力の育成は大切となる。パネルディスカッションの中で、6年生児童が述べた「N I Eは頭がよくなるためではなく、新しい発見をすること。そしてみんなが幸せになるために必要だと感じた」という言葉が、印象に残った。

長所と短所を理解し活用

■米子市立義方小学校教諭 堀田 純生



「I C TでひらくN I E新時代」のスローガンで開催された本大会は、I C Tの研究を行う傍ら、N I E実践指定校に認定された本校にとって、今後の研究推進のために参考になる内容であった。

学習指導要領によると、情報活用能力の育成を図るため、コンピュータや新聞の適切な活用を図る－とある。

基調提案、パネルディスカッション、各分科会、大会総括で共通して強調されたのが、紙とI C T双方の長所と短所を理解し、目的に応じて適切に活用し、児童に思考・判断・表現力を身に付けさせることである。

一方、「N I EとI C Tが両輪で進む時代、教師がアクセルを踏み続けると教師も子どもも苦しくなる」と言われた。どちらも、適切に活用していきたい。

生徒の成長につなげたい



■岩美町立岩美中学校教諭 出田 涼介

この度は大変多くのことを学ぶ機会を設けていただき感謝している。本校で実践していることとは別の角度からのアプローチを拝見することができた。

大会を通じて、多方面からのNIEに対する思いを感じ取った。教員側だけではなく、生徒、さらには企業や新聞社の人の考えを聞くこともでき、担当者だけの取り組みから全校を挙げての取り組みへと昇華できるよいきっかけとなった。

全教科での取り組みや、ICT機器、シンキングツールを絡めた実践など、興味深い知見を得ることができ、大会を通して、自身の成長を実感している。全国大会で得た知識や情熱、考え方を本校において還元し、生徒の成長へとつなげていきたい。

人とのかかわりは不可欠



■鳥取県立鳥取西高等学校教諭 中野 美紀

大会テーマ「ICT」の波は、学校現場にも押し寄せている。実践発表でも新聞をタブレットで読むのは日常となっており、児童生徒がおのおのの端末で共同編集し、新聞制作ソフトまで使いこなす様子が見られた。

オンラインで遠く離れた人とも連携している今、「協働」の形も対面に限定されなくなっている。しかし、今大会では、グループで話し合いながら作品を手作りする事例も多く見られ、対面はまだ健在だった。それは、デジタルによる効率や見栄えの良さ以上に、直接の対話や協力を重視しているからだと思う。

地域課題を考察する実践でも、解決の糸口は地域の声を伝える新聞やフィールド調査での対話にあった。ICTは便利な道具だが、人との直接的なかかわりは学びに不可欠だと実感した大会であった。

鳥取県N I E推進協議会 会則

(目的)

第1条 鳥取県N I E推進協議会（以下、協議会という）は、N I E（Newspaper in Education）の略称にちなみ、教育界と新聞界が協力し、新聞を生きた教材として活用し、現代社会に対応した情報能力を育成する教育を進めていくことを目的とする。

(事業)

第2条 協議会は前条の目的を達成するため次の事業を実施する。

- (1) N I E実践校・実践者を日本新聞協会に推薦すること。
- (2) N I E実践校・実践者への研究補助に関すること。
- (3) N I Eに関する研究会を開催すること。
- (4) N I E実践・研究成果の紹介や普及に関すること。
- (5) そのほか必要と認めたこと。

(構成)

第3条 協議会は次に掲げる者で構成する。

- (1) 学識経験者
- (2) 鳥取県教育委員会
- (3) 市町村教育委員会教育長会
- (4) 鳥取県小学校長会
- (5) 鳥取県中学校長会
- (6) 鳥取県高等学校長協会
- (7) 鳥取県私立中学高等学校長会
- (8) N I E実践指定校
- (9) 日本新聞協会
- (10) 朝日新聞社鳥取総局
- (11) 毎日新聞社鳥取支局
- (12) 読売新聞社鳥取支局
- (13) 産経新聞社鳥取支局
- (14) 日本経済新聞社鳥取支局
- (15) 中国新聞社鳥取支局
- (16) 山陰中央新報社鳥取総局
- (17) 新日本海新聞社
- (18) 共同通信社鳥取支局
- (19) 時事通信社鳥取支局

(役員)

第4条 1、協議会に次の役員を置き、総会で会員の中から互選する。

- (1) 会 長 1名
- (2) 副会長 若干名

(3) 幹 事 若干名

(4) 監 査 2名

2、役員の任期は事業年度の期間とする。ただし再任は妨げない。

3、役員の任務は次の通りとする。

(1) 会長は協議会を代表し、会務を総括する。

(2) 副会長は会長を補佐し、会長が欠けたときは副会長の1名が職務を代行する。

(3) 幹事は会務を処理する。

(4) 監査は会計を監査する。

(総会)

第5条 1、協議会は、事業計画そのほか運営に関する重要な事項を決定するため毎年1回定期総会を開くほか、次の場合に開催する。

(1) 事業の実施状況の報告。

(2) 会長が特に必要と認めたとき。

2、総会は会長が招集し、その議長となる。

(委員会)

第6条 特定事項について検討審議するため、委員会を置くことができる。

(経費)

第7条 協議会の運営に関する経費は、会員新聞社・通信社の拠出金および個人、団体などからの補助金、その他の収入を充てる。

(事務局)

第8条 協議会の事務局は新日本海新聞社内に置く。

(事業年度)

第9条 協議会の事業年度は、毎年4月1日から翌年3月31日までとする。

(補足)

第10条 会則の変更は総会の議決を経なければならない。この会則に定めのない事項は、会長の承認を経て委員会に諮り決める。

(付則)

1 会員新聞社・通信社の拠出金は当面、新聞社が1社年額6万円、通信社が1社年額3万円とする。

以 上

「出前授業」 「ゲストティーチャー(GT)」 のご案内

鳥取県NIE推進協議会は、県内の小中高校を対象に新聞記者を講師として派遣する「出前授業」および「ゲストティーチャー(GT)」を行っています。

出前授業は、新聞を教材として「新聞の基礎知識」「新聞の読み方」「新聞編集」「新聞記者の仕事」などについて授業を行うほか、新聞記事の作成体験などを通して、児童生徒に知識や技術を伝えていきます。GTでは、通常の教科の時間に記者がゲストとして訪れ、先生と一緒に授業を行います。

※内容は一部変更となる場合があります。



出前授業およびGTのお問い合わせ・お申し込み
鳥取県NIE推進協議会事務局(新日本海新聞社読者センター内)
電話0857(21)2877(9:30~17:00、土日祝除く)



教育に新聞を
Newspaper in Education

発行2024年7月8日

鳥取県NIE推進協議会

事務局

〒680-8688 鳥取市富安2丁目137番地
(新日本海新聞社読者販売局販売部読者センター内)
TEL 0857(21)2877 FAX 0857(21)2891